

2023. 2. 12. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書16章1～13節
『仕えるという課題』

以前いた安中教会ではたびたび礼拝説教に福島県いわき市にある常磐教会の牧師をお招きして震災と原発事故に関するお話を聞きました。ここでわたしたちが共有しようと目指したものは、単なる学びや研修の類ではなく、「震災後と原発の今をどう生きるか」という問いが深く投げかけられていることに対する「わたしはどう応えるのか」という課題でした。それは、小さな被災教会を援助するとか仕えるなどという構造のことでは決してなく、わたしたち、つまり「教会」にとってその事柄は何を意味するかというわたしたち自身の礎が問われているということだったのです。信仰とは、礼拝に参加することとは、この「問われ」の前に自分自身をいつもさらし続けることなのです。

本日の箇所は「不正な管理人のたとえ」という小標題から始まります。一読すれば、なぜ「不正な管理人」などのずるがしこさを見習わねばならないのかと考えてしまいます。勝手に主人の貸しを安くして損害を与えたではないかと考えます。しかし、当時の貸し借りというのは管理人が利子の運用を委託されておりました。その利子たるや結構法外なもので食料品ならば50%が利子だったといえます。ここでは油100バトス(1バトスは約40リットル)のうち50バトスが利子というわけです。さらに小麦100コロス(1コロスは約230リットル)の場合は20コロスが利子だったということになります。その利子を引いてやったわけですから、べつに主人の財産に損益をもたらした訳ではないということなのです。ややこしい話ですね。

ここで主人の言う「不正にまみれた富」というのは不正な手段で得た金という意味ではなく、この世の富全般を指すという程度のことです。この管理人が不正とされたのは同胞から高利をむさぼる世俗的利益を追求する生き方を指します。ルカは皮肉をもって弟子たちに、高利貸しですらこのような知恵を働かせるのだから、あなたたちはこの世の富を賢く利用して貧しい者たちを援助せよというのです。それは最期に述べられるように、人とは「神と富とにつかえることはできない」ものであるということです。つまり、この世の富は手段でしかなく、

仕える目的ではないことが明らかに宣言されてゆくのです。

信仰とは、そして仕えることとは何なのでしょう。よく「しっかりと前進しよう」などとスローガンを立てるような団体がありますが、はたしてそんなものなのでしょう。いいえ、違います。信仰や、その内実である「仕え」とは、前進することではなく後退することなのです。神を目的として求めてゆくことではなくて、神の目的となって自分自身が深く問われつつ退いてゆくことこそ、信仰と仕えの本質ではなかったでしょうか。問われて前進することも現状を維持することもかなわず、一体どうしてよいかさえも分からないまま、とにかく自分自身が変わって行くより他にはないということなのです。信仰とは、そして仕えることとは、生きる目的を示して、それへと導いて行くようなものではありません。それは今わたしたちがある、まさにそのところを常に問い直され、突き崩されして、決して安住を許さないものなのです。